

金光教の声

平成
24年
4月～
6月
放送分

NO.399

【もへじ】

《あなたへの手紙》

第一回 金光様／謝れない子 1

第二回 人前に立てない／就職浪人中 5

第三回 仕事が退屈／お葬式は不要? 9

第四回 息子の就職／会話が苦手 14

《ころの散歩道》

第一回 1年2組32人十ひとり 18

第二回 間違いい電話 23

第三回 心のごちそう 27

第四回 いい人? 31

第五回 おばあちゃんの話 35

《天地は語る》

第一回 たらいの水 39

第二回 神様と仲良く 44

第三回 その時は都合が悪くても 50

第四回 「カワイイ」が世界に溢れだす 55

《あなたへの手紙》

第一回 金光様／謝れない子

おはようございます。大阪府の堺市にありません金光教鳳教会の工藤由岐子です。

香川県にお住まいの祐介さんという十七歳の受験生の方から、次のようなお便りを頂きました。

「金光教のラジオ放送を初めて聞きました。その中で『金光様』と言われていたのがちょっと気になりました。おそらく金光様という一番偉い人なのでしょうが、普段はどこにいて、何をしているんですか？」

このようなご質問です。祐介さん、お便りありがとうございました。

金光様は金光教の教主で、岡山県の金光町にいらっしやいます。毎朝、自宅から歩いて、神様をお祭りしてある場所に向かわれます。午前四時からお祈りをし、お結界という所に座っておられますので、初めてお参りする方でも、大人でも子どもでも、話を聴いてもらうことや教えを受けることも出来ます。一日も休むことなく続けられていますので、どなたでも、金光様に直接会うことが出来るんです。手続きなど要りません。

祐介さんは受験生なんですね。私も、あなたと同じ受験生の時に、金光様をお願いをしたことがありました。不安でいっぱいでしたが、「ど

うぞ、合格出来ますように」とお願いをしますと、金光様からこのように言われました。

「まずは元気に受験が出来ることじゃのう。その上で、実力が充分に発揮出来ますようにとお願ひしましょう。合格・不合格はその次のことじゃなあ」

私は、「おっしゃる通りだ」と思い、肩の力が抜けて受験の日を迎えられました。

あの日から三十年が経ち、受験生の子どもを持つ親となりましたが、今でも当時の金光様のお言葉が、心の中に刻まれています。

金光教の教会は、海外を含めて千五百あるんです。いつもそこには教会の先生がいて、金光様と同じように悩みの大きい小さいに関わらず、どんなことでも聴かせて頂いています。

お供えの強制はありませんし、信仰の押しつけもないです。もし、良かったらお気軽に、お近くの教会を訪ねてみて下さい。

それでは祐介さん、体に気を付けて受験勉強頑張ってくださいね。



次に紹介しますのは、兵庫県にお住まいの美由紀さんという三十代の主婦の方からです。

「私には三歳になる男の子がいます。おしゃべりは二歳ぐらいからしていますが、これまで一度も、『ごめんなさい』と言ったことがありません。このまま謝れない子になったらどうしよう、心配しています。何かアドバイスがあればお願いします」

このようなお悩みです。お便りありがとうございます。

私にも娘がいるのですが、その子が幼い時、私も同じ経験をしました。お手紙を読ませて頂きながら、当時のことを思い出しました。お気

持ち、よく分かります。小さいお子さんと毎日接していますと、戸惑うこともあって当然だと思います。良い子に育って欲しいという思いがあるからこそ、心配になるのが親心ではないでしょうか。多分、親にとっては、子どもがいくつになっても気に掛かる存在ではないかと思えます。

お手紙の中で、「謝れない子になったらどうしよう」と言われていますが、お子さんはまだ小さいですから、心配しなくても大丈夫ですよ。美由紀さんのお母さんとしての思いは、ちゃんと通じています。

私の娘も小さい時には、「ごめんなさい」が、なかなか言えませんでした。例えば、コップを割った時もそうでした。私は、ケガをしていな

いか確認しながらも、「ごめんなさいは？ ごめんなさいは？」と娘に言わせようと必死でした。しつけのつもりだったのですが、今思うと、

「ごめんなさい」という言葉を押し付けていたのかもしれない。その時は、「強情な子だなあ」と思っていました。今となり気付くことがあります。娘を責めるよりも、「ケガはない？ コップさんも使ってもらおうと思っていたのに、痛がっているかもなあ。可哀想やな。ごめんな」というように言っておけば、たとえば、「ごめんなさい」という言葉が出せなくても、自然と、「いけなかったなあ」という気持ちで、子どもにも芽生えていたかもしれませぬ。そういう私も、日々の生活の中で、素直に「ごめんなさい」の一言が、言えない時もあったよ

うに思います。声に出さないと相手に伝わりにくいので、言葉は大事だと思いますが、同じ言うなら、口先だけでなく心を込めたいものです。

私の好きな金光様の御歌があります。

ちちははも 子供とともに生まれたり 育た

ねばならぬ 子もちちははも

ちちははも 子供とともに生まれたり 育た

ねばならぬ 子もちちははも

子どもを授かることによつて、初めて親にならせて頂きます。子も親もスタートは同じ。子どもが三歳なら親も三歳、子どもが小学校に入

学したら、親も小学一年生。

私自身、いまだに子どもから教えられることがたくさんあります。これからも、親子一緒に成長させて頂きたいと思います。

美由紀さん、どうぞ先を楽しみに、子育て、頑張って下さいね。また何かありましたら、いつでも聞かせて下さい。



《あなたへの手紙》

第二回 人前に立てない／就職浪人中

おはようございます。九州は福岡県、金光教直方教会の藤本有輝です。

今日最初のお便りは、熊本市に住む女子高校生、ミチルさんからのお便りです。

「私は今、高校二年生です。小さい頃から将来の夢は学校の先生になることでしたが、実は人前で話をするのがとても苦手なんです。お友達とおしゃべりしている時は全然大丈夫なのに、改まった時や場所では話が出来ません。例えば、教室の前に立ってクラスの前で話をしようとする、突然ドキドキしてきて、

すぐ緊張してしまい、今自分が何を話しているのか分からなくなってしまうのです。もうとても恥ずかしくて、みんなの顔を見てられなくなってしまう。このままでは夢を諦めるしかないと思います。何か人前であがらない方法がありませんか？」

このようなお便りを頂いています。

ミチルさん、あなたはとてもラッキーですよ。なぜなら、一番適した人にこの手紙が届いたから。私も若い頃からとても緊張するたちで、今も実はドキドキなんです。だからこそ、ミチルさんの気持ちはよく分かります。今日は、緊張してもうまく話が出来るコツを伝授しますね。

人は誰でも、多かれ少なかれ緊張すると思う

んですよ。緊張することが悪いことのように思われがちですが、適度に緊張感を持って物事に当たることは大切なことだと思います。ただ、緊張し過ぎては、自分の力をうまく発揮出来ませんね。

私も子どもの頃からよく緊張するので自意識過剰だと言われたこともありましたが、そんなに人目を気にしなくてもいいんですよ。あと、人前で話すことに慣れていないということもあるはず。失敗してもいいから積極的に人前で話す稽古をすれば、少しずつ慣れてきて苦手意識も薄れてくると思いますよ。

私も学生時代、教育実習に行きました。そこで初めての授業をした時、大失敗だったんです。

授業の準備はバッチリだったのに、いざ教壇

に立つと緊張してしまい、チョークを持つ手が震え、黒板に書く時、カタカタと音がして生徒たちに笑われてしまいました。その時は自分がやるんだという気持ちが強かったですね。次の授業からは、教室に入る前に神様に、「授業をさせて下さい」ってお願いしたんです。すると、不思議なことに心が落ち着いて、思った通り、いや思った以上に授業をすることが出来たんです。

ミチルさんも話をする前に、一人でやろうと思わずに、神様をお願いしてから始めると、きつと落ち着いて、そんなにあがらずに話が出来ると思いますよ。ぜひ試してみてくださいね。

次は、山口県にお住まいの二十三歳の青年、たかふみさんからです。

「私は今年の春、無事に大学を卒業したのに、内定をもらっていた会社が倒産してしまい、現在、就職浪人中です。先日、金光教の信心をしている伯母から、『信心辛抱してると、きつとおかげがあるから』と言われました。その時は気休めを言っと思っていましたが、時間が経ってきて未だ就職先は見つからず、伯母の言った言葉が段々と気になってきました。『信心辛抱』って普通の『辛抱』とは違うのですか？ またそれで就職出来ますか？」

このようなご質問です。たかふみさん、お手

紙ありがとうございます。そうですか…、大学を卒業しても就職出来ないなんて、大変ですね。私があると同じ年頃の時も、日本はちょうどバブル経済がはじけた後で、就職出来ない時代でした。先行きの見えない不安な中での就職活動、本当に苦勞していると思いますが、その先にはきつと明るい未来があると願っています。決して諦めずに就職活動に励んで下さいね。

それでは、たかふみさんのお尋ねに答えたいきます。

あなたの伯母さまの言われた、「信心辛抱すればおかげがある」という言葉、この「信心辛抱」が今回、たかふみさんにとって助かりのキーワードになるかもしれません。今の時代、辛抱という言葉は余り使われなくなっただけで、辛

すが、だからこそ、たかふみさんには気になったんだと思いますよ。もちろん、今あなたは辛抱してだと思います。なかなか就職先が見つからず、やけを起こしたいところ我慢強く辛抱して毎日過ごされているでしょうね。

一方、金光教で使われている、「信心辛抱」とは、次のような意味で使われていますよ。人は何か願い事があつて神様をお願いしますが、なかなかおかげが受けられない。すると、もう駄目だと思つてすぐに諦めてしまう人もいます。そこを諦めないで、神様に願い続けながら取り組ませてもらおうと必ずおかげが頂ける、ということ。多分、伯母さまは、あなたの就職のことを神様に一心にお願いしているに違いありません。それも毎日、自分のこと

以上に。だからこそ、あなたに、「信心辛抱しているとおかげがある」と言えたのではないでしょうか。

たかふみさん、今あなたはすごい困難に出合っていると思っっているでしょうが、決して諦めずに立ち向かっていって下さいね。そして、もし良かったら、伯母さまと一緒に教会へ行つて就職出来るように神様をお願いしてみてもどうでしょうか。お願いしながら、先を楽しみに、就職活動に励むこと。きっとおかげが頂けると思いますよ。



《あなたへの手紙》

第三回 仕事が退屈／お葬式は不要？

おはようございます。私は名古屋にありますが金光教今池教会の浅野弓と申します。今朝は、こんなお便りを頂きましたのでご紹介します。二十四歳の悩める男性と書いてあります彼から頂きました。こんなお便りです。

「大学を卒業し、昨年の春から社会人になりました。今までは仕事を覚えたり、環境に慣れるのに必死でしたが、ようやく慣れて来ました。すると、ほとんど毎月同じことの繰り返しだと気づき、定年までこんな毎日かと思うとうんざりしてしまいます。仕事ってみんな、こんなふ

うでしょうか？」

こんなふうなのでしょいか、と問われたら、そう、そういう面もあるわね、としか言えませぬね。もしかしたら仕事を変えたら違うんじゃないだろうか、と思っっているかもしれないね。でも、どんな仕事でも基本的には同じことの繰り返しだと思えますから、仕事を変えてみようと考える前に、ちよつと私の話を聞いて下さい。生きるって：と、ちよつと大げさかもしれないませんが、生きることは同じことの繰り返しが基本なのです。考えてみて下さい。太陽も月も星も、毎日出では沈み、沈んでは出での繰り返し。海の波も寄せては返す、その繰り返しです。人間の体の中だって、食べて出すの繰り返し。毎

日違うものを食べているようでも、体の中では、同じ働きが繰り返されているのです。それぞれの器官が飽きもせず、毎日毎日同じことの繰り返しをキチンと働いてくれるから私たちが生きていられるんです。単調な働きの繰り返しが私たちの命のもとなんです。しかも、それが同じように繰り返しされるといふことはとても有り難いことだということが分かります。心臓が突然、ドキドキツとしたら、大変じゃないですか。

だから、同じことの繰り返しはつまらないことではなくて、有り難いことなのです。

あなたの仕事もその繰り返しの中に大切なものが生み出されているはず。 「どうせ、同じ」なんて思わず、「どうぞ、今日も」という

思いで、丁寧に取り組んで下さい。

教会の近くに大きな桜の木がある家があります。春になって、桜が満開になり、やがて散り始める頃になると、そこのおばあちゃんは、毎日毎日丁寧に落ちた花びらを掃除します。その姿からは、「どうせまた散る」という思いは微塵^{みじん}も感じられません。私はその姿に感動を覚えるほどです。きっとあなたの仕事ぶりも、誰かが見ていてくれるはずです。あなたの大切な人生の一日、どんなことにも心を込めて丁寧になさって下さい。必ず、実りますから。



次のお便りにいきますね。四十代の女性の方からのお便りです。

「最近、お葬式をしない人が増えていると聞きますが、金光教ではお葬式をどう考えていますか？」というお尋ねです。

そうですね。そういえば、家族だけでひっそりと故人を偲びましょうという家族葬とか、直接火葬場に行ってしまうばいというような話を聞きます。

それなのに一方で、ペットも家族同様なんだからと、ペットのお葬式が増えていたりもするのですよ。なんか不思議ですね。でも今朝は、人間に限ってお話しますね。まず、なぜお葬式

は要らないかもと考える人が出てきたか、というところから考えてみましょう。

現在のお葬式では、例えば上司の親のお葬式に行くというような場合には、亡くなった人の顔も知らないということがあります。そういうお付き合いはしたくないとか、とにかくお葬式にはお金がかかる、というイメージもあるように思います。でも、大切なペットならお葬式もきちんとしたいと思うのですから、人間の場合もお葬式が要らないというよりは、今までのようなお葬式を見直しましょうということなのかもしれませんね。

さて金光教ではお葬式をどう考えますか、というお尋ねでしたね。金光教ではお葬式はその人の人生最後の儀式と考えます。お宮参り、七

五三、成人式、結婚式など人生の節目節目を過ぎて、いよいよ最後の儀式がお葬式というわけです。生まれてきた時には、みんなおめでどうと言いますね。そして、成人式も結婚式もおめでどうって言いながら過ごします。そのように過ごしながらの、いよいよ最後の儀式がお葬式というわけなのです。ですから、寂しい、悲しい、辛いというだけでなく、「命を頂いて、尊い人生を送らせて頂きました。ありがとうございます。ありがとうございました」と神様にお礼を申し上げたい、というのが金光教の考えるお葬式が一番大切な中身となります。亡くなった人の代わりにご葬儀をお仕える人がお礼を申し上げるといふ形をとります。

また、お通夜の中では御霊遷しみたまうつしという儀式が

あります。これは亡くなった人の体から魂を遷して、神様の御許みもとに導くという大きな意味のある、大切な儀式です。生きているということは、体と魂が一緒にある、ということ、死ぬということは体と魂が離れるということなんです。長年使わせてもらった体にお礼を申して土に帰し、魂を神様の許に導くというわけですから、この御霊遷しはとても厳粛な儀式です。このあたりは、もうちょっと詳しく説明が必要だと思いますので、ぜひ、お近くの金光教の教会でお尋ね下さるといいと思います。

神様に一生のお礼を心から申し上げるためには、かいある人生であることが大切です。その大切な人生の一日、あなたにとって今日がいい日でありますように。

《あなたへの手紙》

第四回 息子の就職／会話が苦手

おはようございます。富山県、金光教富山教会の三浦義雄です。最初に五十代の女性からのお手紙を紹介します。

主人と別れて十年。昨年、ようやく一人息子が大学を卒業し、就職しました。社会人になって、「自分の力で人生を切り開いていくんだ」と、張り切って仕事に行っていました。最近、元気がなさそうで、どうしたのかと聞いてみますと、「今度、新しい仕事を任せられることになったが、自信がない」と言うのです。私は、離婚してからずっと会社勤めをしてきましたが、

男親のように具体的な仕事のアドバイスが出来そうにありません。どう言って、励ましてやればいいでしょうか？

このようなお尋ねを頂きました。

離婚されてから、働きながら、女手一つで息子さんを育てられ、ご苦労も多かったことでしょう。社会人として自立したといっても、親にとっては、いつまでもわが子のが気に掛かり、心配になるものですね。

さて、お尋ねについてですが、若い頃には、「自信を持って、自分の力で人生を切り開いていこう」と考えがちです。実は、私もそうでした。

そうした決意を内に秘めて働き始め、言われ

たことをこなせるうちはいいのですが、新しい仕事を任されて、決意だけではやっていけない現実に直面するんですね。息子さんも、そうなんじゃないでしょうか。

三十年余り前、私は大学を卒業して、高校の教員になりました。四年目に別の学校に赴任して、初めて運動会の担当になったのです。全体を統括するような、責任の伴う業務です。自信はまったくありませんでした。

でも幸い、小さな頃から金光教の信心に触れていたのです、まず神様にお願いました。そして、生徒たちの要望を聞き、先輩の先生方に相談し、みんなに協力してもらい、無事に運動会を終えることが出来たんです。神様や、先生方、生徒たちに感謝せずにはおられませんでした。

もしその時、自信を持つことにこだわったり、自分の力でなんとかやっていけると思っていたなら、きっと途中で挫折していたでしょう。

自分にはそんな自信も力もない、と思えたことで、素直に、また謙虚に、神様や先生、生徒にお願いできたのでしよう。

だから、息子さんが自信をなくすのは悪いことではないと思うんです。自信を持つことにこだわらず、むしろ、自分の力の限界を知って、謙虚に周囲の人から学び、お願いして力を借り、仕事をさせてもらえばよいのです。それは、仕事に限らず、人生全般に必要な心構えではないでしょうか？ そんなことを、あなた自身の体験を交えて話されたらどうでしょう。

最後に、この先も、息子さんのことに限らず、色々な心配事が起きてくると思います。私がそうであったように、神様にお願ひしながら取り組んでみて下さい。きつと、自分の足りないところを神様が足して下さり、心配も薄らぎますから。



次に、二十代の女性からのお手紙を紹介いたします。

私は人と話をするのが苦手です。会話がぎこちなくなり、途切れてしまいます。そのせいか、なかなか人と親しくなれません。もつと会話がうまくなって、何でも気兼ねなく話し合えるようになりたいのですが…。どうすればよいでしょうか？

このようなお尋ねを頂きました。

かつて私は、会話が途切れないようにと、人が話している時、次にどんな話をすればいいかを考えながら、話を聞いていた時期がありました。でも、かえって会話が不自然になり、ぎく

しやくしてしまいました。あなたにもそんな経験はありませんか。

この例に限らず、うまく会話をしようと思えば思うほど、かえって会話がぎこちなくなるものです。だから、上手に会話しようとか、話途中で途切れないように、などと思わないことですね。

まずは、会話の楽しさ、喜びを味わってみるのはどうでしょう。私のお勧めは、金光教の教会に行つて、教会の先生とお話をする事です。

金光教の教会には、「お結界けっかい」と呼ばれる場所があつて、誰でも、話を聞いてもらうことができます。決して無理な勧誘をされることはありません。気楽に教会に行つて、どんな話でもいいですから、先生に話を聞いてもらつて

下さい。

どんなにまどろっこしい話でも聞いてもらへるはずです。こんなことを言えば相手はどう思うだろうか、といった詮索はしなくていいんです。自然な流れに任せて、思いっきり話をしてみる事です。

教会の先生は、心を開いてどんな話も受け入れて下さるでしょう。まずは、存分に話を聞いてもらえる喜びを実感して下さい。

話を聞いてもらえるだけで、心が穏やかになつてくるものです。腹立ちや不安、心配が和らぎます。そして、しだいに、気軽に何でも話せるような感じがしてきます。

きっと、話を聞いてもらえる相手に、親しみを感じ、安心感を持つようになるのでしょう。

そんな関係が出来てくると、意識しなくても、自然に会話も出来ていくように思います。

そのように、話を存分に聞いてもらえる喜びを実感出来れば、実生活で心掛けた大切なことも見えてくるでしょう。それは、あなた自身が出来ること、心を開いて、人の話を受け入れられるようになることです。

あなたが聞き上手になれば、相手の方はきっと、あなたに親しみや安心感を持って下さるはずです。そうなれば、意識しなくても、自然に会話が出来ていくと思いますよ。



《こころの散歩道》

第一回 1年2組32人＋ひとり

以前、小学校教師をしていた私は、桜の花が咲くころになると、入学式で出会ったたくさんの子どもたちを思い出します。

せき一つするのもはばかりなような厳粛な卒業式と違って、入学式はピカピカの一年生が六年生のお兄ちゃん、お姉ちゃんに手を引かれて、手拍子と共に入場して来る時からにぎやかです。「起立」、「着席」という号令も「立ちましよう」、「座りましよう」という言葉に変わって、どこか優しげ。

肝心の子どもたちは、式の途中もなかなかじつとしてなくて、横とつつき合いはするわ、後

ろの子としゃべるわ、中にはお母さんを探して、半べその子もいます。

ある年、私は初めて一年生の担任になりました。

「さ、あなたたちの先生ですよ」。校長先生の言葉に一齐に小さな瞳がこつちを見ます。一年二組三十二名、わくわくのスタートです。

ところが翌日から大変。朝来たら、「ここに座るんだよ」「はあい」

「勝手に友達の手を使っちゃ駄目だよ」「はあい」

「名前書いてあるでしょう」「でも、読めないよう」

「プリントは、お家の人に分かるように字が書いてある方を外に向けて折るんだよ」「はあ

い。あれ、やぶれちゃった」

「手はズボンじゃなくてハンカチで拭くんだよ」「はあい。でもハンカチって何だ」……もう何から何まで。

一週間過ぎたころ、給食が始まります。その日はみんな朝からそわそわ。やっと、お昼になり、「いただきます」。その後、一瞬シーン。次に、「あ、おいしいなあ」「みんなで食べたものすごくおいしいわあ、せんせ」

ニコニコ顔を見合わせます。この子たちの初めての給食に出合えて良かったと思う一時です。

夏休みを越すと子どもたちは、格段にたくましくなります。運動場のはじっこで上級生の遊

ぶのを見るしかなかった子たちが、ベルが鳴るやいなや、ボールを持って運動場に駆け出して行くようになるのです。遊びが増えるとおしゃべりも増え、けんかも増えます。でも勉強に活気も出てきます。

そして冬休みも過ぎ、一年生も後少しになると、楽になったなあとしみじみ思うのです。こちらの言うことがちゃんと分かり、冗談にも笑い、目配せや、小さなサインも気付いてくれるようになります。お手伝いも争うようにしてくれます。まだ小さいからと見くびってはいけません。重い荷物でも、みんなでヨイシヨ、ヨイシヨと持ってくれるのです。

二月、研究授業が行われることになりました。

学校中の先生が一年二組の授業を参観して、

その後、先生同士が話し合うのです。

私はいい授業をしたいとばかり考えていました。でも、それは子どものためというより、他の先生方に自分がしっかりした先生だと言われない、褒められたい。今から思えば、そんな気持ちばかりだった気がします。毎日毎日、頭は授業のことでいっぱいになりました。

さて当日。

「あ、校長先生や」「一組の先生も」

たくさんの先生が教室に入って来るだけで、子どもたちは、はや興奮気味。担任の私は緊張でガチガチ。

授業開始。私の質問に子どもたちは、「はい、

はい」と元気に手を上げます。いつもはあんま

り手を上げない子も、ずっと指先を伸ばして、調子いい。ところが、ふわっと気持ち緩んだからでしょうか、私のある質問をきっかけに話が違う方に向きました。

「あれ？」と思う間もなく、子どもたちが発言すればするほど、どんどん計画とは違う方に話が進んでいきます。いつもなら、落ち着いて軌道修正も出来たのでしようが、何せ、学校中の先生が見ています。焦れば焦るほど頭は真っ白。自分の声が遠くに聞こえます。授業は狙いからも目的からも全く外れた悲惨なものとなりました。

長い長い一時間が終わり、先生方がゾロゾロと教室を引き上げた後、ぼうぜん。失敗やあ。消えてしまいましたかった。

でも、教室には子どもたちがいます。子どもたちは、「先生頑張ったでしょ」と言わんばかりに私を取り囲んでいます。何か言わなきゃ、と思っても言葉が出ません。

突然、「エエン、エンエンエン」。私は大きな動作で大きな声でおどけたように泣き始めました。「エエン、エンエン」。

子どもたちは一瞬キョトン。その後、私と一緒に、「エエン、エンエン」と声を上げ始めたのです。

「エエン、エエン、エエンエエン」
三十二人と一人の大合唱になりました。

何年経ってもこの授業のことを思い出すと、恥ずかしくて、情けなくて、居ても立ってもいられない気持ちでした。

でもある時、ふと思ったのです。そういえば
と、思い出したのです。子どもたちは、あの時、
私と一緒に声を上げて、泣いてくれたなあと。
あれって、すごいうれしいことだったんじゃない
のかなあと。

あの時、子どもたちは私の言葉を待っていた
のでしよう。けど、その先生が大きな声で泣き
出したもんだから、子どもたちも、「そうかあ、
先生が声上げて泣いてるんだから、大きい声を
出せばいいんだな」と思ったに違いありません。
何とか先生の心に沿おう、沿おうとしてくれた
のでしよう。打ちひしがれた時、一緒に泣いて
くれる子どもたちがいてくれた。私はなんて幸
せだったんだらう。ずっと温かいものが心を流
れていきました。

言葉から、計算から、ご飯の食べ方から、私
はたくさんの力を子どもたちに与えたと思っ
ていました。けれど本当は彼ら一人ひとりから、
「先生、先生、先生」とあふれんばかりの気持
ちをもらっていたのです。

このことに気付いた日から、私の飛び上がり
たいくらいに恥ずかしい失敗の思い出は、一年
二組の子どもたちとの、とてもとてもいい思い
出に変わっていきました。



《こころの散歩道》

第二回 間違電話

我が家には、間違電話がよく掛かってくる。多い時には、週に二度、三度、掛かってくる。私が受けた分だけで、そのくらいあるのだから、実際は、もつとあるはずだ。

「はい。もしもし、こちら…」

「あのですね。年金について伺いたいんですけどね。夫は、五十九歳まで会社勤めしてまして」

「あの、どちらにお掛けでしょうか」

「それから実家の八百屋を継いだんですが」

「いや、あのですね」

「うっかり、三年ほど間が空いちゃったんです」

「ここは、社会保険事務所じゃありません」

「え？」

「お掛け間違いです」

「まあ！ 失礼しちゃうわねっ」

失礼なのは、そっちだ。私は、ムカムカしながら、そう思った。

我が家の電話番号は、この地区の社会保険事務所と、よく似ている。末尾が〇一か、一〇か、だけが違うのである。

大都市の中心部だから、所管戸数も多い。その結果、我が家への間違電話も多い、という訳である。

最初に、こちらがちゃんと名乗れば、そこで終わりではないか、と思うかもしれないが、そうはいかない。緊張しているからか、思い込みからか、約六十五パーセントの人は、こちらが名乗ったのを聞き飛ばすのである。ちゃんと聞いたら聞いたで、しばしの沈黙の後、謝りもせずに電話を切る人が多い。そのガチャンという音は、胸に突き刺さる。

間違い電話というものは、こちらからは予防のしようもない。そして、電話が終わったら、不愉快な気分が残る。理不尽だ。どうしたらいいだろう。私は考えた。

私は、思い付いた方法を試した。それは、「あなたが今お掛けになった番号は、これこれです。正しい番号は、これこれですよ」と、優しく教

えてあげる、という方法である。

結果からいうと、成功しなかった。いや、相手からお礼を言われるようになったので、その限りでは失敗でもない。しかし、間違い電話の件数が減らないのである。よく考えてみると、それは当然だった。もともと、一度間違えた人が、また間違い電話を掛けてきたことなどないのだから。

だが、これは、次へのヒントになった。間違い電話それ自体は減らせなくても、不愉快な間違い電話は減らせるかもしれない。それには、まず自分が不愉快な気持ちにならないこと。不愉快な気持ちでしゃべった言葉には、人を不愉快にさせるものが混じるのだから。

「という訳で、これが正しい番号です」

「すみません。ご丁寧に」

「いやあ、似てますからねえ。私もよく間違

えるんですよ」

「…変な人」

ちよつと外したようだ。無理に面白いことを言おうとしても、相手の心に響く言葉でなければ、気持ちよく電話を切ってもらえない。

これはもう電話の問題ではない。人生の問題なのだ。



コンビニに自転車で向かっている。私のすぐ前を、男性が歩いている。二匹の小さな犬を連れていく。犬は、ちよちよこと動き回っている。つぶらな瞳が可愛い。犬に当たらないように、大きく回り込む。しかし、歩行者用の側道には広くない。そう距離は取れない。犬の一匹が、こちらを見た。悪い予感がした。案の定、犬が突っ込んで来て、鼻面をペダルにぶつけ、「キヤン！」と被害者のような声で鳴いた。飼い主の男性が振り返った。

「おい！ 何しやる！」

ムカツときながら、自転車を止めた。その瞬間、「気持ち良く」という呪文が、頭に響いた。

「可愛いわんちゃんですね」

「お？ おう」

「私も、昔、犬を飼ってました」

「おう？　そ、そうか」

「小学校の頃拾ってきて、高校の時、死にま
した」

「え？　死んだのかい」

「ええ。お腹を膨らませてね。寄生虫だと医
者は言っていました。可哀想でした」

「苦しんだのかい？」

「ええ。でも、今考えたら、逆でなくて良か
った」

「逆って何だい？」

「面倒見る側が先に死んだら、もっと可哀想
です」

「そりゃそうだよな」

「じゃあ、失礼します」

「お、おう」

「わんちゃん、ぶつかってごめんね」

そう言っつて自転車を漕ぎ出した私に、男が声
を掛けた。

「兄ちゃん！　頑張れよ！」

うなずいて答えると、私は、コンビニに急い
だ。「ああ、出来た」と思いながら。

今のは、悪くすればののしり合いになるか、
そうでなくても、お互いに不愉快な気持ちにな
らずには終わらないところだった。昔飼ってい
た犬のおかげだな、と心の中で感謝した。

人生で、どれほど、人に出会い、別れるだろ
う。ただの一回だけ会って、二度と会わない人
は、どれほどいるだろう。出会いが、それ以上

良いものに出来なくても、別れは、まだしも努力のしようがある。

間違い電話でさえ快い別れを告げられるようになつたら、私の人生は、うんと楽しいものになるに違いない。



《こころの散歩道》

第三回 心のごちそう

私は、今年の秋に十五回目の結婚記念日を迎える、四十代の主婦です。

結婚して数カ月が経ったころの、父が入院中のことでした。しばらく付き添っていましたが、なかなか容体は良くなり、気が重いまま、姉と交代して一度自宅に帰りました。

玄関を開けると、炒め物のおいしそうな匂いがしていました。

「ただいま」と様子をうかがいながら台所に入ると、コンロの前に立つ夫。そして、夫の傍らから、チャーハンが半分詰められたお弁当箱が見えました。

「おう、帰って来たか。お疲れさん」

夫は私の気配に気付き、ハッ、と一瞬私の方に顔を向けましたが、すぐにまた視線をフライパンへと戻しました。夫が持つフライパンからは、ジュージューと音が聞こえます。

「出来た！」と言いながら、私の目の前に差し出し、見せてくれたのは卵焼きでした。お弁当箱のもう半分には、これを詰める予定だったようです。

夫はちよつと照れ臭そうに、「弁当作って持って行ってやろうと思ってな」と言いました。その表情は、私を驚かせようと思っていたことがかなわなくなつたせいか、少し残念そうにも見えました。

「まあ、ちよつどええわ。出来たてのアツア

ツや。お腹すいたやろ。さあ、はよ食べ」

男気が強く、料理などするタイプには見えないう夫ですが、その思いやりあふれる行動に、私は胸が熱くなりました。

あふれ出そうになる涙をこらえながら、勧められるまま口にした卵焼き。ちよつと焦げ目が付いた、甘くいいその味は、私にとって何よりのねぎらいとなり、沈んでいた心が軽くなってくるのを覚えました。

小学生のころ、風邪を引いて学校を休んでいた時のことです。

トントントントン……。寝ている二階の部屋に向かつて、母が階段を上がって来ます。私はその足音が聞こえてくるのが楽しみでした。

「良くなった？」「ごはん食べる？」

様子を見に来て、構ってくれることがうれしくて、この日も心待ちにしていました。

トントントントン……。あつ、来てくれる！

母は、布団の中の私の顔をのぞき込むなり、

「買い物に行くけど、何か食べたい物ある？」

何がいい？」と、意気込んだ様子で私に問いかけます。迫ってきた母の表情からは、「何も要らないとは言わさないよ。しっかりと食べて早く元気になるよ」という言葉まで聞こえてくるようでした。

母の思いに反して、私は食欲がなく、食べたと思う物がありません。けれど、何も要らないと答えると、がっかりさせてしまうのではないかと、と幼いながらに察知しました。

「とりあえず何か答えよう……。何がいいかな

あ、負担を掛けず、手に入りやすい物がいいな

あ、何かないかなあ……」と、考えを巡らせ、思

い付いたのが「あんパン」でした。母に向かっ

て、「あんパン」と答えました。しかも、「こ

しあんのおあんパンがいい」と注文しました。

「ああ、これで母をがっかりさせずに済んだ」

と思えて、私は満足でした。注文を取り付けた

母は、私以上に満足そうでした。

トントントントン……。「あつたよ、こしあ

んのおあんパン」。うれしそうに、弾んだ声が聞

こえます。

「良かった」。ホッとして、私も何だかう

れしくなりました。そして、買って来てくれた

あんパンを手にした途端、本当にあんパンが食

べたくなってきました。一口ちぎっては口に入れ、ちぎっては口に入れ、あんパンってこんなおいしい物だったかと、不思議な気持ちにもなりながら、結局、丸々一つペロリと食べてしまいました。

私自身が入院した時のことです。朝食に食パンが出ました。それを包んだプラスチックの袋には、パン屋さんの名前と、「一日も早く全快されますよう、お祈り致します」というメッセージが印刷されていました。

袋を開けながら、パン屋さんまでもがパンを作りながら、回復を祈ってくれていると思うと、うれしくて、感激して、入院中の励みにもなりました。食べ物に込められた人の思いや祈りが、

心を支え、いのちの支えにもなっていることを実感しました。

体調が優れず、食欲がない時や、心が疲れて折れそうになった時など、ふと、思い出の卵焼きとあんパンの味がよみがえってくることがあります。日々食事を頂いています、時に、心にもごちそうを頂いているように感じることもあります。

夫や母、そして、パン屋さんの祈りに力付けられ、支えられたことを思い返しながら、私も周りの人にそんな温かい働き掛けが出来ていくように願っています。



《こころの散歩道》

第四回 いい人？

最近、左膝の調子が良くない。今まで膝が悪くなったことなど一度もなかったのに、もう年なんだろうか、階段を降りる時、ズキッと来ることがよくあるのだ。「しばらく我慢していればそのうち良くなるだろう」と安易に考えていたのだが、それがなかなか良くならない。仕方がないので、思い切って近くの整形外科で診てもらうことにした。

朝九時、受付を済ませて待合室へ行くと、もう大勢のお年寄りの人であふれかえっていた。みんな顔なじみなのか、あちこちで話が弾んでいる。私は黙ってテレビを見ていたら、隣のお

ばさん三人組の、楽しそうな会話が耳に入ってきた。私の存在など、まるで眼中にないようだ。

「ねえねえホラ、今度出来た、ホラ、駅前のお医者さん……」

「あの、白い建物？」

「そう。あその先生、大学病院から来たって聞いたから行って見たのよ」

「で、どんな先生だった？」

「それがね、若い先生で、ちょっと頼りないの」

「頼りないって？」

「病状を聞いてね、それからパソコンで調べるの」

「そりゃあ頼りないわね」

するともう一人のおばさんがすかさず割り込

んできた。

「私を通ってる、クリニックの先生、いい先生よ」

「へえ、どんな、どんな？」

「何でも私の言うこと、聞いてくれるの。疲れてるから、ビタミン注射して、って頼むと、何にも聞かないで、すぐしてくれるし」

「いいわね、それ」

私はそのおばさんたちの話に、「それって、ホントにいい先生なの？」と、思わず声が出そうになった。



ある晴れた五月の日曜日、所用で京都まで出掛けることになった。乗るのはいつもの電車、姫路からだど片道約一時間半、通勤、通学の人たちでごった返す平日の車内とは違って、さすがに日曜日の車内はゆったりしている。

電車が出発して少しウトウトしかけたところ、向かい合わせの席の、五十歳くらいのおばさん二人の話し声が聞こえてきた。勤め先の上司の悪口を、大きな声でやりだしたのだ。普通、人の悪口を言う時にはヒソヒソと、小さな声で言うもの。ところが旅先の油断からか、電車の中だというのに声がやたらとでかいのだ。

「そうよ、私よりずっと若いくせして、偉そうに言うのよ」とか、「ろくに仕事も出来ないくせに、人がちよつとでもミスすると、みんな

の前で罵倒するの」とか、とにかく次から次へと出てくる出てくる。私はだんだん目が覚めてきてしまった。が、目を開けるわけにはいかな

いから、寝たふりしてその話を聞いていた。
一しきり悪口を言ったので心が晴れたのだろうか、今度は一転して違う上司の奥さんの話になった。

「それがいい人なのよ、この奥さん」

「ふーん、そうなの？」

「ええ、とにかくいい人なの」

私はもう、完全に目が覚めていた。目は塞いではいたが、耳に全神経が集まっていた。ものすごく興味があったのだ。このおばさんの言う、「とにかくいい人」とは、一体どんな人なんだろう。

「それがね、時々職場にクッキーを持って来てくれるのよ、みんなで食べてって」

「そりゃあ、いい人だわ」

「でしょう。そんないい人、なかなかおらんよ」

そんな会話を、今度は二人とも真面目にし始めたのだ。私はこの会話がおかしくて、笑いをこらえるのに必死だった。正直に言うと、ちょっとバカにしていたかもしれない。

「あんなたちの言ういい人って、クッキーを持って来てくれる人のこと？」



もう大昔の、私が高校の時のことだが、遊びに行った隣町で、今でも忘れられない出来事があった。

校内では知らない人がいないくらいの不良だった同級生のA君が、道路が渡れずに困っていたおばあさんの手を引いて渡っている姿を、偶然見掛けたのだ。ビックリして私は自分の目を疑った。いつものA君とは違った感じがしたが、それは紛れもなく、A君なのだ。

その日以来、私の彼への評価は、「いい人」に一変してしまった。

「いい人」の定義付けは難しい。どんな人を指して「いい人」というのか、考えれば考えるほど、分からなくなってくる。自分に都合のい

い人？ 判断の基準は人それぞれで違うのかも
しれない。

そんなあやふやな「いい人」なのだが、正直に言うと、それでも出来たら私は、「いい人」でいたい気がするのだ。

自分なりに考えた「いい人」とは、自分の損得など何も考えず、他人のために何かが出来る人のこと。どんなに優れた考えをしても、考えているだけで、実際に人のために何もしてないのであれば、それは決して「いい人」とは言えないように思うのだ。

しかし、そんなことを考えていると、今まで、自分のことを「いい人」などという思いが、少しだけあったのだが、どうも、そうではないよ
うな気がしてきた。

「たかがクッキーごときで」と、他人のことを笑ってしまったが、その「ごとき」でさえ、私は何も出来ていないのだから。

おばさんたちがいなくなつて静かになつた車内で、私は、何も出来ていない自分が、だんだん気になつてきて仕方がなかつた。



《こころの散歩道》

第五回 おばあちゃんの話

私は四十代の主婦。もう三十五年以上前かな。母と一緒に、おばあちゃんの家うちに遊びに行つた日のことを思い出します。子どもの頃の思い出は、夢の中での出来事だつたような、記憶も飛び飛びなんですが、案外、おばあちゃんから聞いた話は覚えてたりします…。

祖母は、九州で育つた人ですが、私が遊びに行つていた頃は、大阪の堺さかいという所にいました。その時、七十歳くらいでしたが、当時の七十歳といえば、腰の曲がつたおばあちゃんというのが普通でした。だけど祖母は、背筋がピンと伸びてて、エネルギーで、何事にも一途な人

でした。

「よつこらせ〜！」と気合いを入れて、重たい漬け物石を持ち上げます。「これは、四十年床のぬか・なんやで」と、中からキュウリと水ナスを取り出し、新聞紙にくるんで、帰り際にもつも渡してくれます。時々、たくあんももらうのですが、帰りの電車で、その臭いがプンプンするのを恥ずかしいと感じた覚えがあります。

「何か、別の臭いに間違えられそう〜」。でも、母の方は、「おばあちゃんの漬け物は、最高においしいからねえ」とうれしそうです。

ある時、祖母の肩をトントンたたいていたら、こんな話を聞きました。

「おばあちゃんの日課は、朝早はやくう起きて、表の長い道路をホウキで掃くことなんや。前は先

に、神棚にご飯をお供えしてから表に出てたんやけど、やつぱり、人が通る前に奇麗にしておこうと思てな。ずーっと続けていることなんや」

「ふーん、しんどくないの？」

「汗はかくけど、気持ちがあええでー」

祖母の話は続きます。

「神様のノートというのがあつてな…」

「神様のノート？」

「そう。例えば、何月何日、誰々はああやつた、こうやつたと、ええことも悪いことも全部ノートに書かれるねん。誰も見ていないところは、神様が余計見て下さつてるような気がしてな」

その時の私は、幼かったせいか、「ふーん、そうなんやー」と、特に疑うこともなく、普通

に聞いていました。

「神様のノートかあ……」

その後、二十年が経ち、私は大人になり、結婚をしました。が、悩みが出来たこともあり、私。私の浮かぬ表情を見て、九十歳だった祖母が言いました。

「どんなことも、ハイッ、ハイッ言うて、素直に受けさして頂き。『若い時の苦労は買かうてもせよ』っていう言葉がある。若い時やからこそ、出来るんやで。『買かうても』とまで言われてるのやからなー」

何だか、おばあちゃんからそう言われると、押し付けじゃなく、素直に耳に入るので、不思議な感じですよ。

また月日は流れ、祖母は九十八歳です。真つ

直ぐだった腰は、くの字に曲がり、杖をつきなからトボトボと歩くようになりました。

ある日、私は祖母と一緒に、近所の踏切の前で、電車が通るのを待っていました。

「開かずの踏切」と言われるように、十分経ち、二十分過ぎても、まだ開く様子がありません。私は「ハーツ……」と深くため息をついて、「おばあちゃん、しんどくない？」と声を掛けると、「いやー、有り難いことやなあ」という、まさかの返事が返ってきました。

「え？ どういうこと？」

「電車の行き交う時間が長くなればなる分、たくさんの方の事を祈れるからなあ」

「何をお祈りしてるの？」

「うん。『電車が無事に目的地に着きますよ

うに。運転手さんも車掌さんも、お客さんにも
けがや過ちのございませんように』ってな。新
聞を見てても、悲しいニュースがいっぱいある
やろう。『どうか、そういう人たちの心が救わ
れますように…。亡くなられた方の魂が助かり
ますように：』とお願いをするのやけど、時間
がいくらあっても足らん」

祖母は、近所の人と話をしているも、「あそ
この家の誰々さんが入院したんやって」と聞け
ば、その後、自宅の神棚の前で、回復を願って
いるんだそうです。

祖母は言います。「歳を取ると、身体は動き
にくくなるんやけど、お祈りだけは出来て、そ
れがうれしゅうてな。布団に入っても、や
れるからなあ！」

そんな祖母は百一歳で旅立ちましたが、なん
だかいまだに、私たちのことを心配して、祈っ
てくれているような気がします…。

自分の未来を考えました。歳を重ねるって、
どういふことなんだろう。シワが増えて、耳も
遠くなつて：つらいこともあるかな。いや、
でもまた喜びもあつて：。そんなことを繰り返
しながら、人って豊かになつていくのかなあ。
おばあちゃんのようにになれる自信はないけど、
せめて、ほんのわずかでも人の心に安らぎを与
えられるような、そんな自分になれたらいいな
ー。



《天地は語る》

第一回 たらいの水

ナレーション

「おかげはたらいの水である。向こうへやろうとすれば、こちらへ来る。こちらへ取ろうとすれば、向こうへ行く」

これは金光教の教祖、金光大神の教えの一つです。今日はこの教えについてのお話です。

聞き手 先生、おはようございます。

先生 おはようございます。

早速ですがあなた、たらいをご存じで

すか？

聞き手 はい、何となく…。

先生

桃太郎のお話で、おばあさんが川へ洗濯をする時持つていく、木で出来た大きな桶おけのようなものですよね。

はい、そうです。その中に水を張り、洗濯物を入れ、ズツと向こうへ押すと、水がたらいの縁に沿ってこちらへ返つて来ますね。その反対に洗濯物を手前に引くと、今度は水がたらいの縁に沿って弧を描くように、向こうに戻って行きますよね。

聞き手

たらいの中で洗濯物を押す、引く…確かに水の動きは手の動作とは反対方向に集まっていきます。

先生

そうなんです。理科の実験みたいな話になりましたが、その水の動く様子を

見て金光教の教祖は、おかげを頂くコ
ツを教えて下さっているのです。

聞き手

先生、たらいの水のように、おかげを
向こうにやるとこちらに来て、こちら
に取ろうとすれば、向こうへ行くって
よく分からないんですけど。「向こう
へやろう」の「向こう」とは、相手と
いうことですか？

先生

はい。いい質問をしてくれましたね。
「向こう」とは、相手と考えられます
ね。自分のことばかり考え、相手の分
を取ってまで自分が得をしたいと思っ
ていると、かえって人から疎まれ、信
用をなくし損をすることがあります
が、相手が良いように良いようにと相

手のことを思っているとかえって、人
から用いられ、結果、思っていた以上
の成功を得ることがあります。その実
例として真里さんという商売をしてい
る方のお話をしましょう。

聞き手

はい、お願いします。

先生

和紙を扱う真里さんのお店には、色と
りどりの友禅紙、昔ながらの紺色や赤
色の型染めの和紙などが着物の反物の
ように店に並べられています。とても
目に美しく、通りすがりの人も足を止
め、店に入ってゆっくり眺めてくれる、
そんなお店です。

聞き手

結構そうなの、興味あるんですよね。
行ってみたいですね。

先生 はい、そう言つて店に入つて、和紙の

小物などを買つて行かれる方もいるんです。でも、和紙そのものはどのよう
に使つて良いのか分からず、興味があ
りながら、普通の紙の十倍もする値段
の物を買う方は、なかなかないそう
なんです。

聞き手 なるほど。

先生 商売繁盛を願いお参りしている真里さ
んに、私は、「お客様はあなたが引つ
張つて来たのではないんです。神様が
引き寄せて下さった人なんです。自分
がもうけようもうけようと思わずに、
一人ひとりの方が喜ぶようにするには
どうしたら良いか分からせて頂きまし

よう」とお話ししました。

聞き手 「たらいの水」のたとえ話ですね。

先生 はい。そうしましたら真里さん、お客
様が喜ぶ和紙を使った手作り教室を始
めることを思い付きました。その教室
の一つにくす玉作りがありました。

聞き手 くす玉つて、ひもを引つ張ると割れる
物ですか？

先生 いろいろなくす玉がありますが、教室
では簡単なパーツを三十枚ほど組み合
わせ、こんぺいとうのような形にする
ものを教えました。それは、和紙を使
うことで着物と帯を合わせるような楽
しみがあり、出来上がりも紙の配色で
可愛らしくもシックな感じにもなるバ

リエーションが広がるものでした。

聞き手　こんぺいとうの形の飾り玉なんです

ね。

先生　はい、そうです。くす玉は評判も良く、二十名くらいの方が皆、奇麗に仕上げていきました。でもその中の七十代の平井さんだけが仕上がらず、格闘していました。真里さんは、途中でやめないうで出来上がりの喜びを感じて欲しいと思って、出来るまで根気強く、繰り返し教えてあげることになりました。普通二時間ほどで終わりますが、三時間が経ってもまだ出来ません。そうなる」と真里さんは、「材料費だけで講習料はもらってないのに」とか、「一人の

人にこれだけ時間を掛けては商売として成り立たない」とか、だんだんイライラした気持ちになってくるのです。

でも、「お客様は神様が引き寄せた人。大切にしなければ。たらいの水、たらいの水」と思い返し、四時間の時間を掛け、とうとうくす玉が完成しました。その時の平井さんは少女のように輝いた達成感のある笑顔をしていたそうです。

聞き手　そうですか。本当に良かったですね。

先生　はい。実はその後、平井さんが、「今までやってみたいと思いながら、自分是不器用で駄目だと思っていたのが、根気よく教えて頂いて出来上がった物

を、人に差し上げたらとても喜んで下さり、うれしくて、この歳で新しいことが出来た喜びは格別です」と言って、その後も何度も店に来て下さり、くす玉の材料の和紙を大量に買ってくれたそうです。

聞き手 それは、良かったですね。相手が喜ぶように、水を向こうにやったらこちらに来たんですね。

先生 ええ。でもそれだけではないんです。平井さんの娘さんがくす玉をもらい、その話をテレビ局にお勤めのご主人に話すと、ぜひ番組で取り上げたいということになり、お店や教室のことがテレビで放送されたのです。

聞き手 そんなサプライズがあったんですか！

先生 はい。まさに神様のなさることは私たちの想像をはるかに超えていますね。

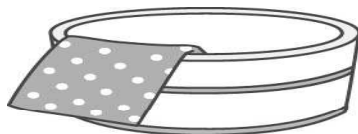
聞き手 何かお話を聞いて元気が出てきました。先生、今日はありがとうございました。

先生 ありがとうございます。

ナレーション

「おかげはたらいの水である。向こうへやろうとすれば、こちらへ来る。こちらへ取ろうとすれば、向こうへ行く」

今日はこの教えについてのお話でした。



《天地は語る》

第二回 神様と仲よく

ナレーション

「人間が神と仲よくする信心である。神を恐れるようにすると信心にならない。神に近寄るようにせよ」

これは、金光教の教祖、金光大神の教えの一つです。今日はこの教えについて先生にお話を伺いします。

聞き手 先生、よろしくお願ひします。

先生 こちらこそ、よろしくお願ひします。

聞き手 率直な感想なんです、私、神様のことを、「困った時にお願ひする相手で

しかない」と思っていましたから、「仲よくする」なんて言われると、何だか人間同士みたいで新鮮に感じました。

先生 なるほど。人間同士のそのような神様との関係って、面白いでしょ。

聞き手 はい。

先生 私は、「神と仲よく」ということで、いつも思い出すことがあります。娘との思い出なんです、私の娘が、まだ幼稚園に入るかどうかという頃に、こんなことがあったんです。

聞き手 はい。

先生 ある朝、教会で、娘と一緒に祈りしていました。とてもいいお天気ですね、

外を通る車のガラスで反射した太陽の

聞き手　　そうかも知れませんね。

光が、障子窓にキラキラと輝くんです。

先生　　今、ぬくもりと言って思い出したんで

それを見た娘が、「お父さん、神様が

すけどね、「この人たちは、神様と仲

来てくれてるよ」って、とてもうれし

よしなんだなあ。ほっこり温かいなあ」

そうに言っただんです。娘が、幼いなり

って感じたお話を聞いて下さい。

に神様を身近に感じ取っているのが分

聞き手　　はい。

かって、うれしくなりました。今は少

先生　　私の友人親子のことなんですけどね。

し難しい年頃で、「神様なんか…」っ

高校って、お弁当を持って行くでしょ

て言ってますが、それでも毎日神様に

う。お母さんに作ってもらってね。

手を合わせていますよ。

聞き手　　ええ。

聞き手　　可愛らしい姿が目には浮かびます。神様

先生　　ある朝、友人は、自分のお弁当と、お

と仲よしなんですネ。

兄ちゃんのお弁当を間違えて学校へ持

先生　　ええ。気持ちのいい太陽の輝きから、

って行ったそうです。

神様のぬくもりや明るさを感じ取った

聞き手　　はい。

んでしようね。

先生　　それで、その日家に帰ったら、お母さ

んに、「あんた間違えたやろ〜」って、ちよつときつい口調で言われたそうなんです。

聞き手 おかずに違っていたのでしょうか？

先生 いいえ。全く同じものだったそうですよ。

聞き手 じゃあ、どうして…？

先生 お母さんは、友人にこう言ったそうです。

「私はあんたらを育てるのに、何の分け隔てもしてないよ。だから、もちろんお弁当も一緒や。だけど、兄弟でも、体調の良し悪しとか、張り切っているとか、ちよつと元気がないなとか、見てたら分かる。お母ちゃんは、それぞれ

れのお弁当を作りながら、『お兄ちゃん

んは、今、こうですからよろしく、弟は、こうですからよろしく』と、毎朝

神様にお願ひしてるんよ。だから、一個一個違うお弁当なんよ。間違えんといてなあ」って、そう言ったそうです。

聞き手 お母さんの愛情が伝わってきましたね。

先生 ええ。友人は、このお母さんの言葉聞いた時、お母さんが、お弁当を間違えたくらいのこと、きつい口調になった訳がよく分かったそうです。そして同時に、友人は気付いたというんですよ。

聞き手 何にですか？

先生 「お母さんは、こんなに細やかに僕ら

のを見て、祈ってくれていた。でも神様は、僕のこともお母さんのことも、兄やお父さんのことも、もつとちやんと見ていて下さるのではないか。両親にも見守られてきたけれど、神様からも見守られてきたんだなあ……」つてね。

聞き手 へー。高校生なのにすごいですね。

先生 友人は、小さい時から家族で教会へお参りしていましたからね。友人は、お母さんの親心を通して、神様のお心を感じ取り、神様にぐっと近付いたのだと思います。

聞き手 はい。

先生 神様からも、愛され、祈られてきたこ

とに気が付いた瞬間の驚き、そして、包まれるような安心感は、本当に大きなものだっただろうなあと思うんです。神様に近づくことで頂ける安心感、毎日幸せを感じて暮らしていけるかどうかの、大きな鍵ですからね。

：あのね、金光教の神様は、天地金乃神様といって、私たちに魂と体を与えて下さるいのちの元なんです。例えて言えば、人間にとって親のような存在です。

聞き手 神様って、人間の親なんですか。先生 そうです。人間にとつての親ですから

ね、神様に対しては、子どもが親を慕うように、頼むことは遠慮せずに頼み、

つらい時には甘えていけばいい。そして、自分は、どう生きてゆけば、親が喜び、安心してくれるか、親孝行が出来るのかに力を注いでいけばいい。神様とは、そんな風に関わればいいですよと、そんな意味合いの教えだと思います。

聞き手 なるほど。

先生 今、親子関係のもつれから起こる事件も多いですが、私はね、子どもを大切に思うがあまりの、悲しい出来事だと思っんですよ。

聞き手 と言いますと…？

先生 我が家でもそうですが、子どものことを必要以上に心配し、言わなくてもいい

ことを言ってしまったりする。それが元で、親子関係にひびが入ったりもするものです。

聞き手 私もよくケンカしました。

先生 子どもの成長とともに、その年齢に合わせた関わり方を求め続けていくことが、よい親子の関係には欠かせませんよね。

聞き手 そうですよね。

先生 私はね、神様と私たちの関係も、同じではないかなあと思うんです。仲よくなりたいなあと思いつながら、よりよい関係を求めていけば、どんどんいい間柄になれるのではないのでしょうか。

聞き手 そうなんです。先生、今日は心温ま

るお話をありがとうございました。

先生　こちらこそ、ありがとうございました。

ナレーシヨン

「人間が神と仲よくする信心である。神を恐れるようにすると信心にならない。神に近寄るようにせよ」

今日はこの教えについて先生にお話を伺い
しました。



《天地は語る》

第三回 その時は都合が悪くても

ナレーション

「信心していれば、その時は都合が悪いようでも、神の仰せにそむかないでいると、後になつてから、あれもおかげであつた、これもおかげであつたということがわかつてくる。これがわかるくらいの信心をしなければ、信心するかいがない」

これは、金光教の教祖、金光大神の教えの一つです。今日は、この教えについてのお話です。

聞き手 先生、こんにちは。

先生 こんにちは。

聞き手

今日は、この教えについてお話を聞かせて下さい。信心していても良いことばかりではなく、都合が悪いことも起きてくるんですね。

先生

そうですね。でも、その都合が悪いところが、信心していればおかげになつてきます。神様は、人の身の上に決して無駄事はなされませんから。信心していると、そのことがよく分かるようになりますよ。

聞き手

そうですね。

先生

今から四十年近く前のことですが、チエさんという方の体験を通してお話しますね。チエさんの一人娘、清子ちゃんはとても優秀で、国立の大学を目指

していました。高校の先生も、清子ちゃんなら大丈夫と太鼓判を押すほどでした。ところが落ちてしまいました。本人はもとより、お母さんのチエさんは驚くやら、がっかりするやらで。

聞き手 それは残念でしたね。

先生 チエさんは教会に来て、「娘は、あれほど本気で勉強し、しかも神様にお願いでして信心にも励んだのに、落ちてしまいました。どうしてでしょうか」と訴えました。

聞き手 それで先生はどんな言葉を掛けたんですか。

先生 「ええつ、清子ちゃん落ちたつて！

うーん、神様は清子ちゃんの使いどこ

ろをどう考えておられるんだろうかなあ」と。

聞き手 ええつ？ 神さまが清子さんの使いどころを……ですか。へー。それはどうい

うことなんでしょうか？

先生 信心とはね、心を神様に向けることな

んです。何か困ったことが起きたり、判断に迷うような時、神様はこのことを通して、私に何を望んでおられるんだろうかと、じっくりと問い掛けてみるんです。そして、神様が良いようにして下さるに違いないと信じて、思うようにならないこともじつと辛抱することが大切なですよ。

聞き手 ふうん。それで、清子さんはどうされ

たんですか。

ね。

先生 一年、浪人しました。最初は、学校の先生になろうと思つて教育学部を受験したのですが、浪人生活を送るうちにドイツ語に興味を持つようになりました。

聞き手 でも、反対されても簡単には諦められませんよね。
先生 そう。それでチエさんは教会に来て、そのことを話しました。

そして目指した大学に合格し、ドイツ語を専攻して学んでいるうちに、本場のドイツでもっと勉強したいと言い出しました。向上心の旺盛な娘さんですね。

先生 「ドイツにねえ。神様は、清子ちゃんをドイツでどう使おうとされるんじゃないかねえ」と。

聞き手 ご家族は賛成されたんですか？

先生 いやいや。それはもうびっくりしてねえ。今でこそ、海外へ出る女性はたくさんいます、その当時、女の子が留学するなんて、もつての他でしたから

聞き手 ええー、それはどういうことなんですか？

先生

先生 ドイツに行くことに賛成とか反対とかではなく、ただ神様がどのようになさ

ろうとしているのかを、チエさんと一緒に求めようとしたんです。

親としては、ドイツに行つて欲しくありませんが、娘の願いの強さに負けて、チエさんはどうとう留学を認めたくんです。この時も、神様が良いようにして下さいと信じて、黙つて娘を送り出しました。

聞き手
それで清子さんは、ドイツに行くことが出来たんですね。

先生
ええ。ドイツでは実業家の家に住み込み、家事やベビーシッターをしながら、それは一生懸命に勉強しました。そしてそのうちに、大変日本びいきのドイツ人男性と巡り会い、引かれあつて結

婚することになりました。

聞き手
わあ、またチエさんは、びっくりされたいですね。

先生
それはもうね。ドイツに行くことにも反対だったのに、ましてやドイツの人と結婚するなど、天地がひっくり返るほどの驚きでしたよ。

聞き手
それでチエさんは、教会に来て先生に訴えるんですね。それで先生は何と言つたんですね？

先生
「あのねえ、ドイツの人といつても神様の氏子には変わりないもんねえ」と言いました。その言葉を聞いて、「ああ、そうだったなあ」と、チエさんは思い直されたようですよ。チエさんの

心の中に、神様の目で物事を捉えていく信心が育ってきていたんです。

聞き手 良かったですね。それで清子さんはその後どうなったんですか。

先生 はい。通訳や翻訳の仕事をしてきました。また、ご主人と一緒に度々日本の実家にも帰って来ていて、チエさんも、ご主人のお人柄に触れて、すっかりお気に入りの方です。そして今では、金光教の教典などの翻訳にも取り組んでいます。同時にドイツの人々が助かっていくために、自分を使って頂きたいという大きな願いを持って、いろいろな取り組みをしています。

聞き手 ああ、清子さんはドイツでそのように

活躍されているんですね。大学受験に失敗したことは、清子さんの新しい願いが生まれてくる大きな転機となったんですね。

先生 はい。またチエさんが何かあると、まず教会に来て話を聞き、神様の願いはどこにあるのだろうかと求めていかれたんです。その姿勢が大切なんです。聞き手 そうですね。よく分かりました。

先生 先生、今日はありがとうございました。ありがとうございます。

ナレーション

「信心していれば、その時は都合が悪いようでも、神の仰せにそむかないでいると、後にな

ってから、あれもおかげであった、これもおかげであったということがわかってくる。これがわかるくらいの信心をしなければ、信心するかいがない」

今日は、この教えについてのお話でした。



《天地は語る》

第四回 「カワイイ」が世界に溢れだす

ナレーション

「広い世間には、鬼のような心を持っている者もないとは言えないが、人間であったら、気の毒な者を見たり難儀な者の話を聞けば、かわいそうになあ、何とかしてあげたらと思うものである。神の心は、このかわいいの一心である」
これは金光教の教祖、金光大神の教えの一つです。今日はこの教えについてのお話です。

聞き手 先生、はいっ、これどうぞ。

先生 かわいい花ですね。おっ！ ナデシコですね。これ、どうしたんです？

聞き手 近くの土手を歩いていたら見付けたん

です。あんまりカワイイかつたんで、少しだけ摘んで来ました。

先生 そうですか。いやつ、わざわざどうも。

聞き手 ところで先生、今日の教えにも、「カワイイの一心」とありますが…。

先生 はい。「かわいそうになあ、何とかしてあげたら…、神の心は、このかわいいの一心である」とありますねえ。

聞き手 私も、「あつカワイイ！」って、つい無意識に使ってるんですけど…、でも私の言うカワイイには、「かわいそうに、何とかしてあげたい」という気持ちはないようなんですけど。

先生 うん、あなたのおっしゃるカワイイは、

例えば、この服カワイイとか、笑顔がカワイイとか…。そうでしょ。

聞き手 はい。カワイイ花や、カワイイ女性とか…。

先生 もともとはね、かわいいというのは、「気の毒で見えていられない」とか、あるいは、「ふびんで何とかしてあげたい」というそういう使われ方が、むしろ一般的で…、その意味では、今の使われ方は、だいぶ違うんですねえ。

聞き手 そうだったんですかあ。

先生 この教えのかわいいもね、もともとの意味で…、例えば、我が子のことを親がかわいそうで心配して見守る、あるいはふびんで何とかしてやりたい、助

けてやりたい、もつと言えば幸せになつてもらいたい、といった、そういう放っておけない一途な思いの現れでね、そこから来るかわいそうという思いのある、かわいいということなんです。ねえ。

聞き手 我が子のことを思う心のようなもの：

ですか？

先生 そう。子どもの幸せを、願いつける親の心と同じ。しかもそれは、神様が、全ての人間に対して、もちろんあなたにも向けられた、幸せになつて欲しいとの神様の一途な心でね、それがこの教えが言わんとする大切なポイントなんです。ねえ。

聞き手 私の幸せを願っている神様の心：です

か？

先生 そう！ そして重要なことはね、この、

「神の心」すなわち、「かわいいという心」は、人間だったら誰もが持っているとおっしゃっていることなんです。ねえ。

聞き手 神様の心を、私も持っている：？

先生 まさにそこが大切で、気の毒な人を見

たり、困っている人の話を聞けば、「かわいそうに、何とかならないのかなあ」と思う：、あなたの心から自然と湧き出るその思いは、神様の心そのものだというんです。ね。

聞き手 そう言えば先生、今の話を聞いて、ち

よつと思ひ出したことがあります。

先生 何ですか？

聞き手 去年三月の東北で起きた地震の後、新

聞で読んだんですが、日本各地にある
刑務所の受刑者からの義援金が記録的
な金額になつていゝというニュースが
あつたんですよ。

先生 そうそう、ありましたねえ。私もたま

たま、震災後に、近くの刑務所にちよ
つと研修で行つた時に、施設の職員の方
方からも、そのことを聞きましてねえ。

聞き手 たしか全国二千人以上の受刑者から、

合計で二千万円を超える義援金が寄せ
られたと新聞にあつたように思いま
す。

先生 ああー、そうそう。

聞き手 私、あの記事を読んだ時に感激したん

です。「かわいそうになあ」つていう
気持ち、みんな同じなんだなーつて。

先生 あの時は、世界の各地から、多くの支

援が寄せられ、その支援の輪は、日本
を中心にどんどん広がつていつたんで
すねえ。まさに、「かわいそうに、何

とかしてあげたい」の神様の心を、私
たち人間は誰もが持つていて、だから
こそ、世界中の人々の心の中にある、

「何とかしたい」が同時進行で行動に

現れたと言えるでしょうね。

聞き手 不幸な震災の中にあつて、その一方で、

全ての人の心の中に、神様の心があふ

れ出したんですね。

先生 神仏への信仰のあるなしに関係なく、あの時の支援の現れは、神様の心そのものの現れであったと言え、この教えそのままと言えるでしょうね。

聞き手 でも先生、私ちよつと反省してるんです。震災直後は、「私にも何か出来ないか」と思い、ささやかなことでしたが支援をさせて頂いたんですが、この思いがなかなか継続出来ないんです。恥ずかしいことなんですが…。

先生 私も同じ…。でもねえ、金光教の教祖様は、世界中の人々が常に、「かわいいようになあ、何とかしてあげたい」の、この思いで満たされて欲しいと願って

おられたそうです。出来ないじゃなくて、この教えの、「かわいい」の思いを捨てない、ということが今は必要なかも知れませんよ。

聞き手 あっ、そういえば先生、今、「カワイイ」が世界の共通語になりつつあるのご存じでしたか？

先生 えーっ！ そうなんですか。

聞き手 日本の若者文化が世界中を魅了していて、特に海外の若者の間で、今でいう「カワイイ」が注目されてるんですよ。

先生 私はね、ぜひ、この教えの、「かわいいの心」によって、世界中が包み込まれるといいなあと思いますねえ。

聞き手 そうですね先生！ 今日には本当にすて

きな話をありがとうございました。

先生　こちらこそ、ありがとうございました。

ナレーション

「広い世間には、鬼のような心を持っている者もないとは言えないが、人間であつたら、気の毒な者を見たり難儀な者の話を聞けば、かわいそうになあ、何とかしてあげたらと思うものである。神の心は、このかわいいの一心である」
今日はこの教えについてのお話でした。



金光教本部 ラジオ放送係

【住所】 719-0111

岡山県浅口市金光町大谷320

【電話】 0865-42-6453

【FAX】 0865-42-2114

【メール】 w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

北海道放送	(土)	午前5時10分	山陽放送	(日)	午前6時35分
東北放送	(日)	5時00分	中国放送	(土)	5時50分
ニッポン放送	(日)	4時30分	南海放送	(日)	6時00分
東海ラジオ放送	(金)	5時25分	RKB毎日放送	(日)	6時50分
和歌山放送	(日)	6時50分	宮崎放送	(日)	7時10分
朝日放送	(水)	4時50分			

こころで聴くおはなし

<http://www.konkokyo.or.jp/radio/>